

2018年12月14日

小諸市協働連携事業調査研究活動による提言書

中山間農村の活性化にむけた地域住民の取り組みをどう活かしていくか

重富真一（明治学院大学国際学部教授）

目次

1. はじめに
2. 調査の概要
3. 地域開発の営み—学生の聞き取り調査から
 - (1) 農業技術改善と農村の組織化
 - (2) 農村女性の権利向上と女性が主体の地域作り
 - (3) 地域による直売所の新たなチャレンジ
 - (4) 農業新規就農の条件作り
4. おわりに—提言に代えて

1. はじめに

小諸市はその大部分がいわゆる「中山間地域」に属し、地域経済・社会の活性化が重要な課題となっている。今回、明治学院大学国際学部重富ゼミ3年生は、11月10日—11日の間、小諸市を訪問し、地域の方々が地域経済・社会の活性化にどのように取り組んでいるのかを調査・学習した¹。

ゼミ生は2年の秋学期に日本の戦後農業・食料事情の変化と日本の農村社会構造に関する文献学習をおこなった。また今回の訪問に先立って、中山間地農村地域社会が抱える課題についても学習した。ゼミ生の中に長野県出身者が二人いたので、彼らが自らの経験をもとに中山間地域の状況をゼミで説明し、ゼミ全体で問題意識を共有した。こうした一連の学習をもとに、日本の農業と農村地域社会の実態を自分の目と耳で学ぶことが、今回の訪問の目標である。

以下では、調査対象者と調査日程を簡単に説明し、つづいて学生による聞き取り内容をまとめたうえで、その中からとくに重要と思う点について整理をして、小諸市への提言とした。

2. 調査の概要

1日目（11月10日）は大里地区の滝原集落で調査を行った。まず地区内を視察し、農村

¹ 重富ゼミは、農業・農村問題、途上国の開発問題をテーマに学習しており、2018年8月にはタイ農村の農家にホームステイしながら現地調査をおこなった。

における地域社会のイメージを作った上で、小諸市農林課の佐藤係長から、中山間地域が抱える諸課題についてレクチャーを受けた。その後、学生は3つのグループに分かれて、農業と地域経済・社会の活性化に取り組んでこられたAさん、Bさん、Cさんから、グループごとに懇談形式でお話を聞いた。

調査2日目は、山浦地区の久保集落で新規就農し、野菜栽培に取り組んでおられるDさんからお話を聞いた。

本提言書は、これらの聞き取り調査結果を学生がまとめたものを重富が編集したものである。したがって本稿の内容のすべての責任は重富にある。

なお、学生はこれらの調査以外にも、マンズワインの小諸ワイナリーを見学し、農家民宿青雲館に宿泊して家庭の味を楽しんだ。また今年も民宿天池荘のご主人にはご厚意でリンゴ狩りをさせていただいた。これらすべてが学生にとって忘れられない思い出となった。調査にご協力いただいた小諸市のみなさまと、調査のアレンジをしてくださった小諸市農林課農業ブランド振興係長さん、総務部企画課市民協働推進係さんに、感謝の意を表したい。

3. 地域開発の営み—学生の聞き取り調査から—

(1) 農業技術改善と農村の組織化

Aさんは昭和20年3月生まれ、昭和39年に高校を卒業している。ご両親は養蚕と稲作をおこなう農家であった。現在、滝原地区の農地利用最適化推進員を努めており、地域の農地保全に注力している。小諸市によると²、平成28年4月に『農業委員会等に関する法律』及び『農地法』の改正法が施行され、新たに農地利用最適化推進委員が新設された。

高校卒業後、Aさんは就職するために上京し、電気機器メーカーなどに勤めた。将来、家の農業を継ぐつもりであったAさんは、会社勤めの間も「なにか将来農業に還元できるのではないか」と意識していた。

実際に、農業に還元できたと思うことが2点あるそうだ。1つ目は、“人の管理”である。仕事をするに当たって、誰もが与えられた仕事をこなすことは難しい。だれでも壁にあたり悩んだりもする。そこで出た悩み事を聞いてあげる、人の立場に立って接することが大切ということを学んだ。これは農村に戻って地域の協同活動を作るときに役立った。2つ目は、工業製品製造過程で得られた知識である。たとえば農機具の改良を自分でおこない、大幅なコストの削減につながったという。

Aさんの所有する水田の形状には工夫がなされている。作物を栽培する上で、水はけのよい状態をつくることが重要である。南の方角は日が当たる時間が長いことから、一般的に水はけがよいとされる。それ以外の場所の水はけをよくするためには、雨水を通す排水管のパイプに網を被せ、その上を泥で覆い固める。これはAさんの長年の経験や分析から試行錯誤して編み出された独自の工夫である。

² 小諸市「小諸市農業施策等に関する意見書を提出しました。」

<http://www.city.komoro.lg.jp/nBws/2018061300043/>、2018年11月18日取得

小諸の稲作の特色は、高い品質のコメがとれるということである。小諸市のある農家が生産した米が「米・食味分析鑑定コンクール」で金賞を得た。このコンクールは、米・食味鑑定士協会が主催する新米の食味鑑定による国内最大規模の国際大会である。国際大会というだけあって出品米は国内だけでなく、台湾、中国、タイなど国外からも集まる。

その稲を土台にし、市内の農家が協力して更に試行錯誤を繰り返し、より病気や寒さに強いものにするための生産技術を研究している。新たに農薬や除草剤を投入するのではなく、土壌作りを工夫することによって改良を進めている。量産化に成功すればブランド化して売ることができる。またAさんは水の特性、水温、水中の微生物の量などを記録し、そのデータをすべてパソコンで表計算ソフトに打ち込んでいる。長年培った勘だけに頼らず、科学的なデータ分析を基に独自の研究を地道に続けている。

Aさんはワイン用ぶどうの栽培も行っている。単位面積当たりの収入が米に比べて高いこと、日照時間が長い小諸に適した農作物であること、また、作業をするときの姿勢が稲作などに比べて楽であることから、ワイン栽培を始めたそうだ。

Aさんらワイン用ぶどうを生産している農家はぶどう組合を作り、組合としてマンズワインと契約している。マンズワインでの売り上げの支払いは、農協を通して行われる。契約によって価格保証がなされ、肥料や農薬についてもマンズワインの指定がある。ただしぶどう組合の意見も栽培方法に反映されているという。

また防除組合が45年前に結成された。ワイン用ぶどうを生産するためには大型の機械が必要となり、一人では動かすことができない。そのため、4人1組のグループを組み、交代で出役し共同作業を行う。個人が所有する土地面積に応じて出役する日数は異なり、所有する面積が大きいほど出役日数は多くなる。また、不公平感をなくすため、出役日数に応じて日当が支払われることになっている。一定の差をつけることがむしろ平等と考えられるのである。

高齢化や後継者不足などの理由から、所有する全ての農地を管理しきれない農家も多い。Aさんらは、ある程度余裕のある農家で集まり「温交会」と呼ばれるグループを形成した。管理の行き届いていない放棄状態の農地を借りて、ワイン用ぶどうを栽培している。収穫したぶどうを販売することで得た収益は「温交会」参加者の懇親会に使われる。

このように農家はばらばらに農業を行っているのではなく、いろいろな形で組織を作り、農業経営を安定化しようとしている。そういう組織運営の工夫について、Aさんは次のように述べていた。

作業の合間に行われる日常会話のなかで、ワイン用ぶどうの生産に関する改善案はもちろん、政治や市の行政についてなど様々な話題が出てくるといふ。このようなインフォーマルなコミュニケーションの場において、新しい発見がなされることもある。あえて話し合う場を設けずとも日常的に、小諸市が抱える問題等に関する改善案についての会話が行われ、場合によっては、それが徐々に形となっていくのである。したがって、地域社会におけるインフォーマルコミュニケーションの場が、フォーマルな話し合いの場と同等にとっても重要

である。「温交会」も単なる懇親の場ではなく、農家同士で意見を共有する場としての機能をも果たしており、周囲との良好な関係を保つために欠かせない。

とはいえ、中山間地域である小諸の農業、地域社会は様々な課題を抱えている。そのひとつが耕作放棄地の増加である。Aさんはそばの栽培も行っているが、これは耕廃地にならないようにするためのひとつのアイデアである。こうして収穫したそばの実の小諸市内の製粉所に卸すほか、農協での販売も行う。Aさんによれば、耕廃地をつくらないための取り組みとして、ハウス栽培が考えられるという。農地を使いやすいものにし、市内外問わず、若者を地域に取り込むためのひとつの方策であろう。

Aさんは常日頃から、作物に関するデータを収集し分析することを怠らない。表計算ソフトを用いて、水の硬度 pH や土壌の質や温度の管理を行っている。たとえ失敗しても、根気強く実験的な作業を行うことで、よりよいものに改善されていくという。私たちはこのようなAさんの好奇心に終始感銘を受けるばかりであった。行き詰ったら見方やアプローチ方法を変えたりすること、興味関心のあることに積極的にチャレンジしてほしいとのメッセージが胸に響いた。

（２）農村女性の権利向上と女性が主体の地域作り

Bさんは、これまで小諸市の農業委員ならびに市議会議員を務め、農業を中心とする取り組みを通じて、女性の権利向上にご尽力されてきた方である。Bさんは上田市の農家のご出身で、小諸の学校での教員としてのキャリアを終えた後に地域の集会に参加するようになった。そのころ、話し合いの場で“女のくせに”といったコメントを受けたことに衝撃を受け、女性の地位向上のための活動を始めた。

Bさんは他地域の自家野菜等の直売所を見る機会があり、小諸市にも同様の場所を設立して女性を中心に運営することを思いついた。このアイデアが結実したのが「たきばら駅直売所」である。

かつて農村地域では家計の管理の担い手は夫であるのが一般的で、既婚女性が個人の通帳を持っているということは珍しかった。そこで、Bさんは地域の女性達に口座開設を促し、このたきばら駅直売所で販売員として働いて得た給料や、自家野菜の売り上げを振り込むシステムを作り、女性の地位向上に貢献した。実際、たきばら駅直売所を通じて自分の作った野菜が売れることが生活の張り合いになるという声も多い。たきばら駅直売所は、市からの援助金を利用して購入した仮設テントからスタートし、現在は木造一戸建て店舗を構える。直売所の売り上げと小諸市そして滝原区からの援助金で建設した。

長年小諸市の農業委員は男性のみであったが、他の地域での女性農業委員の誕生や、このような取り組みや成果が評価され、Bさんは小諸市初の女性農業委員に就任した。農業委員時代には、地域のコミュニティづくりと耕作放棄地の活用等にご尽力された。地域の女性たちと「マメマメの会」というグループを組織し、耕作放棄地で大豆を作り、小諸市の小学校と協力し収穫・豆腐作りのワークショップを開催した。その後、小諸市の市議会議員を3期

務めた。また地域の女性と「やまぼうし」というグループを組織し、行政の取り組み計画に対しての地域の女性の意見の反映などにご尽力された。

こうした活動の基盤になるのは農業である。しかし小諸では農業法人化する農家は少ない、集落営農もない。農家の後継者問題などから耕作放棄地の扱いが課題として浮上しているため、行政は集落営農を作るための取り組みを始めようとしているが、具体的な取り組みはまだないそうである。小諸では、農地を荒らしたくないため、土地代の納入の代わりにその農地で取れた作物のうち自分たちの生活に必要な分だけ譲ってほしいという条件で土地を担い手農家に託す農家が多いそうだ。

耕作放棄地を増やさないためには新規農業参加者が大切だが、行政のサポートがあまり充実していないため数が少ない。新規農業参加者を増やすためには、一度小諸から外に出ていった住民が小諸の外で得てきたコネクションを活かすことが必要だという。そのためには一度出ていった人の U ターンを促すような、地域の魅力づくりが課題である。また I ターンを推進するためには、災害が少ない、日照時間が長い、耕作が何度でも可能、大きな道路が近くにあるなど小諸の利点を宣伝する必要がある。耕作放棄地の再開発には、多品目の物を育てて様々なニーズに応える、太陽光エネルギーのためソーラーパネルを置く、住宅兼家庭菜園のような形を持つ家を建てるなどの方策が考えられるという。

生活しやすい地域社会を作ること、人々を引きつける上で大切である。小諸市の福祉に関する取り組みについても B さんにお話を伺った。

交通やアクセスの点では、デマンド方式交通サービスが導入された。「こもろ愛のりくん」の愛称で親しまれている予約制相乗りタクシーという、小諸市が独自で行っている交通システムがある。通院や買い物など、小諸市のどこに住んでいても日常生活に不便を感じることの無いよう、平成 27 年 10 月より運行が始まった。自宅への送迎により、「安心」を提供している。大人から子供まで利用可能であり、料金は大人 300 円、小中学生 100 円、小学生未満は無料である。高齢者による自動車運転を抑制させることが、このサービスの目的の一部と言える。この一方で、免許返納についての取り組みもおこなわれている。免許返納に関する相談や質問に対応する特別相談窓口を開設し、シニアドライバー交通安全教室を開催している。

公衆衛生・医療の面では、浅間南麓こもろ医療センターの取り組みがある。センターでは、月に一度行政による介護予防活動が行われている。具体的には、「60 代からの筋トレ教室」「ポールウォーキング教室」「大人のための体力向上トレーニング教室」が開催されている。参加費は無料だが、参加対象者は介護保険サービスを利用していない人のみである。また地域で行っている取り組みとして、誰もが参加できる「歩こう会」といった集いがある。近所の人でグループをつくり、地域を歩いて周る健康増進とパトロールを兼ねた取り組みである。

高齢者福祉の面で、小諸市の老人ホームの状況について伺うと、有料老人ホームや介護施設が合計約 25 件あるとのことであった。入居希望待ちとなっても長期間待つケースは少な

いとのことだ。小諸市の老人ホームには、地域住民よりも首都圏から移り住んでくる人が多いそうだ。

教育について我々が疑問を持っていたのは、中高生の進学の実選択肢が都市部に比べて少ないのではないかということであった。しかし、小諸市は小海線やしなの鉄道が通っていることや、佐久市や上田市のような比較的大きな町が近くに位置しているため、高校進学に関しては選択肢が多くあることがわかった。一方で、大学に進学する学生の多くは市外、県外に出てしまうことが多い。

Bさんは長年、市議会議員を務めてこられたので、農村地域における地方議員の選出方法についても伺った。市議会議員候補の推薦方法は都市部とは大きく異なる。都市部では、政党内で推薦がおこなわれ政党の代表者として立候補者を選出するのが一般的であるが、小諸市のような中山間地域の農村部では、政党関係なく地区の代表としてふさわしい人が話し合いによって候補者として推薦されるのが一般的である。話し合いには地区の役員の他、必要に応じて三役以外からも助言を求めることがある。こうした地区代表としての推薦の形態は、都市部と大きく異なっている。

とはいえ、小諸市の市議会議員選挙に当選するためには約 700 票が必要である。滝原地区の票は約 350 票だから、他の地区の人々からも信頼され、投票してもらえる候補者を各地区は推薦する必要がある。

上記の過程を経て市議会議員選挙に当選した後、地区の人々の議員に対するモニタリングはどのようになされるのだろうか。Bさんによると、行政に対する地区の人々の希望を聞く機会は多々あるそうだ。先述のように、Bさんが市議会議員だった際には、女性からの意見を聞く「やまぼうし」というグループを結成し、女性からの意見も聞き、行政に提言がなされた。

以上のように、Bさんは地域社会の課題を解決するために様々な取り組みをおこなってきた。とりわけ女性が参加できる機会や場をつくるために新しいことに挑戦をしてきた。聞き取りをした私たち（学生）は、同じ女性としてBさんから多くの刺激を受けるとともに、Bさんが地域社会のロールモデルとなっているように感じた。

（3）地域による直売所の新たなチャレンジ

Cさんは、現在、たきばら駅直売所の代表である。たきばら駅は女性の地位向上のために 30 年以上前に作られた。Cさんは元々、東御市の農家出身であり、小諸市の農家に嫁いでこられた。現在では小諸市で二人目の農村生活マイスターの認定を受けている。農村生活マイスターとは農村社会の発展を目指し地域の実践的リーダーとして活動することをねらいに、農業経営と農家生活の向上に意欲的な女性農業者のことである。今回はCさんにたきばら駅の現状と課題、村に関するしきたりや合意形成の仕方、女性の地位を中心にお話を伺った。

小諸市滝原地区は地層が粘土質のため桑の栽培に適しており、かつては養蚕がとても盛

んだった。その後、養蚕業が衰退したことにより、農業に重点が置かれるようになったが、粘土質は野菜を作るのに難しい環境であったため、土の改良が必要だった。石灰をまいて中和し、2〜3年かけて土づくりを行った。最近になってようやく土は安定してきたが、中山間地帯であることや、後継者不足など現在も農業を行うのに難しい問題を抱えている。

こうした中で小規模生産の農家でも農産物を販売できる場として、たきばら駅直売所は重要である。たきばら駅では、滝原地区産の野菜が、基本的に1つ100円で売られている。販売されている野菜は農薬の使用量が少ないものなので、安全である。その日に出荷された野菜は売れ残ることは少ないが、もし売れ残った場合は翌日に半額にして販売している。夏にキュウリが大量に収穫されたときは、地元の給食に提供することもあるという。野菜の提供者は、直売所の会員の方々である。直売所設立当初は100人ほどいたが、現在は60人と減少している。定年退職した方を誘うことで会員を増やそうと努力しているが、土質が野菜作りには不向きであることが、会員の増えない原因の一つになっている。

直売所は周辺の環境変化に伴って、対応を迫られているという。滝原集落周辺の消費者、特に若い世代の人たちは、距離が少し離れていたとしても、自分達のニーズに合った大型で魅力のある販売所まで足を運ぶ。若い人にとっては安く、新鮮な野菜を買えるお店よりも、少し高くても一か所で多品目を買うことができ、また子供を遊ばせるような場所があるお店の方が魅力的である。駐車場が小さいため、マイカーで買い物に来る比較的若い層のニーズに対応できていない。かつては、農産物の品質が良く、値段が安いことで集客ができていたが、他の大型販売所が近隣に出現してきた現在では、それだけでは競争に生き残ることができない。これが現在、たきばら駅が直面している大きな課題である。Cさんは、複数の直売所が統合して、市が規模の大きな直売所を作ることを提案しているが、すぐには難しいため、たきばら駅の運営についていくつかの改善努力をしている。

Cさんによると、たきばら駅の特徴や良さを伸ばし、魅力がでるような販売戦略が必要だという。これらの課題を改善するため、Cさんは農業マイスターとして他県の農家へ行き、農産物などの視察を行っている。例えば、栃木県で視察をしている最中に「ダイフク」という中身が黄色く、味が甘いのが特徴的な白菜の品種を知った。その同じ品種をたきばら駅でも販売しようと活動している。このように、たきばら駅では生産から販売までの流れにも、昔と今で変化が見られる。今までは、農家の人が作った野菜を直売所まで持って来てもらい、そのまま販売していた。一方で現在では、たきばら駅側から農家の方に新たな品種や栽培方法などを提案し、生産してもらうよう農家一人一人と話をしをお願いをする。すなわち、これまでは生産者からのプロダクトアウト（作ったものを売る）であったが、次第にマーケットイン（売れるものを作る）に変化していると言える。

以上のように、たきばら駅でも変化する消費者ニーズに合わせて販売戦略を立て、取り組みが行われている。つまり、採れた農産物をただ売のではなく、ブランド化など魅力作りをすることにより販売促進に繋げようと、力を入れている。

Cさんからは滝原地区の社会生活についてもいろいろ伺うことができた。村にはいくつ

かの暗黙の了解がある。例えば村の水田で水を使用する際は水を上の方から順番に使っていく。これは上の水田も下の水田も平等に水を使うためである。また、住民同士、お互いの負担を減らすためにお香典の額は話し合って決める。加えて、以前までは会合の際、お年寄りの意見に従うことが暗黙の了解とされてきた。しかし、今では逆に若い人の意見も尊重されている。このように、「しきたり」も時代とともに変わってきているようだ。

滝原地区では、住民同士で十分に話し合いを行った上で、多数決によって合意形成を図っている。Cさんも、「強引に合意形成をしてもその後にわだかまりが残ってしまう。だから、何か物事を決める時は話し合いが一番重要である」とおっしゃっていた。ただし、土地利用など、重要な案件については全会一致を採用していた。これは、滝原地区の今後に大きく影響する案件であり、合意形成後、意見の不一致によるトラブルが起らないようにするためである。土地基盤整備のような案件は、土地所有者によって賛否が分かれるため、現時点ではなかなか進めることが出来ない。

現在、女性差別はあまりなく、女性の市議会議員がいたりなど、むしろ女性は様々なことを任せられている。家庭内でもお金の管理は女性が行っていることが多い。むかし女性は山の神様のお祭りに参加できないなどのしきたりがあったが、今は女性の参加を禁止にすると参加する人が少なくなってしまうため、このような決まりはなくなった。

このように小諸の農村では村のしきたりが未だ存在しつつも、時代の流れで変化し現在に合った形になっている。直売所では、抱えている問題をただ受け入れるのではなく野菜のブランド化や行政に意見するなど自ら動いている。中山間地域という土地でありながらも持続可能な農村を目指しているのは、小諸の人々が自ら働きかけていることが大きい。

Cさんは、行政と協力して作成した「食ごよみ」という、実にユニークでローカル色豊かな調理本を作成した。この調理本には学生も興味をもっていた。またCさんは、「食を担っていることを誇りに思う」という。誇りがあるからこそ自ら行動し、農村生活マイスターとして地域を引っ張っていけるのであろう。

（４）農業新規就農の条件作り

Dさんは軽井沢町出身で、東京で大学生活を送る中で、大都会の生活に生きづらさを感じたため、地元の軽井沢町に戻り、居酒屋チェーン店に就職する。給料はよくても長時間労働でゆとりのない生活に疑問視を抱き、32歳で退職する。Dさんのお母様の実家が農家であったことから子供の頃から農業に親しんできていたDさんは、農業を自分の次の職業としてイメージするようになっていた。

農業の技術や経営を学ぶため、Dさんは農業大学校に入学した。当初は、ワイン用ぶどうの栽培を考えていたDさんであるが、ぶどう栽培には相当な初期投資が必要で、かつ収穫まで最低 2～3 年は必要といった制約を考慮し、野菜から栽培を始めることにした。そこで、農業大学校では野菜コースを選択した。

農業大学校在学中の 2 年間は、「里親研修制度」によって、二軒の農家（里親農家）で週

2日、研修を行うことになっている。Dさんの里親農家は、一軒は大規模な野菜農家であり、もう一軒は家族経営の野菜農家であった。この里親研修を受ける2年間は、国から年間150万円の援助金（農業次世代人材投資資金）が出る。また就農後の5年間も同様に年150万円の援助金が出る。ただし、農業を辞める場合には、これらを全額返納しなければならないから、農業経営に真剣に取り組まねばならない。

Dさんが就農したのは、2018年の4月からである。就農先は、家族経営の里親がいる現在地（小諸市山浦久保地区）である。久保地区を選んだのは、地区の農業者がDさんの新規就農に期待しており、土地の確保や農機具の借用など、様々な面で便宜をはかってくれることになっていたからである。新規就農者にとってとりわけ土地の確保は極めて重要で、かつ難しい。いくら利用されていない農地があったとしても、素性の分からないものに農地を貸してくれる人はいない。Dさんは里親研修制度で久保地区に里親をもっていたので、土地の確保が比較的スムーズになされた。Dさんが現在使っている土地は4反半であり、その多くが里親の土地、あるいは里親の紹介で借りられた土地である。

現在の栽培作物は、大玉トマト（サンロード）と芋（白土馬鈴薯）である。久保地区ではトマトを露地で栽培し、赤く熟成させてから収穫をして出荷する。生産農家は久保産直会という組織を作っており、東都生協と契約している。しかし地区の農家の高齢化などもあって、生協側の需要にすべて応えるのは難しい状況だという。また白土馬鈴薯というのは、品種的には普通の男爵なのだが、御牧ヶ原の土が粘土質のため白い色の芋ができるので、このように呼ばれる。Dさんは土質（物理性）を改善するため、精米所から出る粃殻を土に混ぜている。

新規就農がうまくいくためには、新規就農者自身の努力はもちろん、行政や地域社会の支援が重要であるとDさんは述べた。地方自治体によっては、新規就農者を積極的に受け入れようとする姿勢に欠けるところもある。逆に、土地と作業スペース付きの家をセットにして提供し、新規就農者を集めている自治体もある。どの市町村で農業を始めるかによって、新規就農のやりやすさがずいぶんと違うそうだ。

地域社会の受け入れ体制も大切である。土地についてはすでに述べたが、住宅の確保も重要である。Dさんは、元空き家の築90年の古民家を、安い家賃で借りることができた。

新規就農者が地域社会に受け入れてもらえるためには、新規就農者が地域の人たちと積極的にコミュニケーションをとることが重要だという。近所の農家からいろいろと教えてもらえるようになるためには、普段から挨拶をする、地区の行事には必ず参加するなどが大切である。また自分が農業大学校などでの研修やセミナーで得て実践している技術について、周囲の農家が尋ねたりすることもあって、こういう双方向の情報交換ができるようにするためにも、普段からの付き合いが重要だ。

4. おわりに一提言に代えてー

今回の調査で我々が学んだことは多いが、報告を終えるにあたりその中からいくつか取

り上げて、小諸市への提言に代えたい。

① インフォーマルなコミュニケーションの力をフォーマルな企画につなげる

地域の人々が地域社会の諸問題を共有し、問題を解決すべき課題に変え、さらに解決の方向性を話し合えるところまでもっていくのは、フォーマルな議論の場ではなく、インフォーマルなコミュニケーションの場である。そうしたコミュニケーションは農村地域社会では多くなされているであろうから、課題はそれをフォーマルなところにつなげていく方法を考えることである。学生が聞き取りした地域の方々はみなさんいろいろなアイデアをお持ちであり、そのアイデアを実践もしておられた。そうしたアイデアや実践と小諸市の政策につなげていくリンケージが必要と思われる。

② 女性のアイデアを引き出す

今回お二人の女性からお話を伺う機会をもち、学生は農村の女性のイメージを変えたのではないだろうか。自分の考えをはっきり述べられ、視野も広く、新しいことを取り込む意欲も旺盛であった。直売所の経営を変えていくことや地域社会の声を吸い上げていくことなどについてのお二人のビジョンを、学生は引きつけられるように聞いていた。こうした女性のアイデアを引き出す仕組みを今以上に作っていく必要があるように感じられた。

③ 新規就農やUターンへの環境整備

新規就農者を引きつけるには、自治体の姿勢と地域社会の受け入れ体制が重要であることをDさんからの聞き取りで学んだ。現在、新規就農者への補助制度はもちろん、担当者の姿勢が自治体によってかなり異なっており、新規就農者が就農場所を選ぶ際の選択基準になっていたり、就農後の農業のしやすさにつながっていたりしている。新規就農者の農業に対する意欲は非常に高く、その数は多いとは言えないのだから、貴重な新規就農者を引きつけるために、自治体は周囲の自治体が準備している条件を見据えて、自らの制度設計をすべきであろう。同じことは地域社会の側にも言えることである。地域社会の高齢化が進むなか、新規就農者は地域社会、地域農業の活性化に大きな役割を果たすことは間違いない。新規就農者は地域の人たちにとって異質な存在かもしれないが、むしろそうした異質性を積極的に取り込む姿勢が大切ではないだろうか。

(以上)